

れた機關に加入するものに對し六割、其他のものに對し四割許可す。

此に於て兩國政府代表が接衝を重ねるも涉らず遂に一九三四年八月三日限り陶磁器積荷禁止を斷行せり、その間積止は完全なる統制の下に行はれ、日本の組合の誠意を披瀝した結果蘭印政府之を認め、八月卅一日限り陶磁器の輸入制限のみ停止し、互譲により爪哇陶磁器輸入組合を解散し、又九月一日より蘭印向積止を解除し、こゝに圓滿なる解決となつた、かゝる紛争の内にも蘭印への陶磁器輸出旺盛を極め、一九三四年は三百十六萬八千圓となり、前年に比べて僅かに五十六萬圓の減少に過ぎなかつた。(未完)

新著紹介

○日本鑛物資料 續第一卷 福地信世 本邦鑛物の形態的研究

研究 伊藤貞市編 四六倍版一四十二五九頁

東京帝國大學理學部鑛物學教室頒布取扱 六月

定價十圓

新著紹介

和田維四郎氏日本鑛物誌再版後十八年になつて其の間の資料は鑛物學專攻家の努力で日に月に集積されてゐる。本書は東京帝國大學鑛物學教室で研究した日本產鑛物の形態に關するものを集輯したもので、之を公刊するに到つたのは昨年物故された本邦鑛物學界の先尊福地信世氏を記念するのと同時に、日本鑛物誌第三版完成への準備とされんとしたものである。編者伊藤貞市氏は東大鑛物學教室を主宰され其の門下には秀才銳士を集められてゐる。こゝに學問と情誼とを兼ね備へた出版を見たのは偶然ではない。まづ本書の幀装を見ると花色紺の落付いたうちにもどこか華かな装調を持つた色布で背には福地信世本邦鑛物の形態的研究と横書されてある。巻頭を飾る故人の英逆和田英作諸伯錚の福地氏肖像が輝いてゐる、之に對して兒玉伯の題簽がある。續いで序として伊藤貞市氏の感激に満ちた日本鑛物誌と福地氏とに對する思慕が美しく書かれてある。内容の一斑を記すると先づ第一に緒論として鑛物形態の研究法が説かれ複圓反射測角器と結晶圖作製の方法が細叙されて居る。以下新進鑛物學者の手に成る日本内地、朝鮮及臺灣の七十六の鑛物の形態に就き新しく描かれた多數の明確な結晶圖と投影圖とを附して詳述され測角データは悉く掲げられてゐる。此の研究の一部は専門雜誌に出されたものもあるが其の原のデータをこゝには書き加へられてあるから後來研究の進められる上に大に役立つものとなつてゐる。卷末には鑛物名索引及產地名索引を附して搜索を便

にしてゐる。猶福地氏の略歴と著作目録とがある。此の一巻は内容外観共に稀に見る専門書であつて、之を敢行した編者の苦心と其の材料を立派に仕あげた豊田英義、片山信夫、中本明、小池四郎、岡田以知二、志賀武彦、須藤俊男、小川雨田雄、大塚英夫、西澤章三郎、杉山隆二、金原均二、神山貞二等の諸氏の學問に對する精進とは福地氏の泉下に於ける満足な微笑を買ふに充分なると共に鐵物愛好者が感謝せねばならぬ所である。終に著作目録のうちに見えぬ福地氏の著しい報告には杉本五十鈴共著の滿洲盛京省邊外南部ノ地質鐵産報告（清國奉天府鳳凰廳及興京廳管内金鐵調查報告明治三十八年所載）のあることを附言して此の禮讃を了る。（ナカムラ）

○地理學年報

第三卷 菊版二五七頁 東京裳華房發行
七月 定價三圓

東京文理科大學地理學教室内に編輯所を置いて毎年主として前年に於ける我國地理學界を展望する年報第三卷は盛裝して出版された。本卷には論文を載せず展望のみとしたのは其の本來の意義を強調したものと云へる。其の目次を舉げると下村彦一氏の本邦地圖類、小野鐵二氏の地理學史、佐々保雄氏の水河問題、吉村信吉氏の湖沼學並に海洋學の二篇、福井英一郎氏の氣候學、今村學郎氏の地形學、松井武敏氏の地理學、米倉二郎氏の歴史地理、綿貫勇彦氏の人文地理學でかなり賑かである。各擔當者は斯學の權威であるから論文の内容を彷彿させると共に展望者の意見をあからさまに吐露してゐ

○地理論叢

第六輯 京都帝國大學文學部地理學教室編
菊版二九一頁 東京古今書院發行 四月
定價二圓八〇錢

京都帝國大學文學部地理學教室關係者の研究發表と啓蒙機關である本論叢の矢繼ぎ早やに續刊されることは我が地理學界を啓發することが著しい。本篇には小牧助教の多年研究されつゝある海岸研究の一篇として「本邦海岸潟湖埋積埋立開拓史の斷片」（第一報）の克明な研究資料を初めとし、瀧本貞一氏の「近畿地方の交通型」や島之夫氏の「六甲山塊南北の比較」や内田秀雄氏の「堅田の移動的漁民」の如き近畿人文地理の或る方面を取扱つた論文、近藤忠氏の「河川流域に於ける人口分布の一型式」と題して豊後大野川流域、三友國五郎氏の「筑豊炭田」の如き九州に關するもの、織田武雄氏の

る。この點は本年報の特徴とも云ひ得る所で、原論文を読みきれぬ紹介者の如きに執つては僅かの時間で原著の梗概を窺ふことが出来ると共に其の論文の學界に對する貢獻の程度を學ぶことが出来る。展望のうちにはどうしたことか公にされた著しいものが舉げられてゐないものもある。例へば地圖類中人口分布地圖の條下に田中館秀三氏の二葉の東北地方人口分布圖（昭和九年十一月發行）につき言及して居ない如きである。かゝる地理學上重要な資料は必ず紹介し批判せねばならぬものである。地理學年報第四卷には飛耳長目の諸賢が御捕ひで展望されんことを望んで止まない。（S）

「等時線圖の作圖上に於ける諸問題」の如き地理學方法を論じたものの外、安藤鏗一氏の樺太のバルブ・製紙工業、朝永陽二郎氏の知多半島の産業、山口平四氏の清水港等の産業の地理學的考察が掲げられてゐる。特に百花爛漫の觀があり、地理學研究者の必讀に値するものと思はれる。(S)

○北海道地學に關する文獻目錄 (II) 部門別

北海道地質調查會報告 第五號 四六倍判 四+

一三一頁 北海道地質調查會發行 四月

著者別につきましては本誌二十三卷一號(一月號七五頁以下)に紹介して置いたが、今度其の材料を地質、古生物、礦物、岩石、應用地質、地理及地形、火山、地震、溫泉及地下水、其他に別けて排列したもので索搜には甚だ便利である。魯魚の誤は誠に少ない様であるが型録のとり方のおかしなものがまだ残つてゐる。パンペリーの著書の出版年が一八六六であるべきが書名につられて一八六二—一八六五となつてゐるのや大井上氏の夕張と空知との報文出版が前後してゐることを養にも注意して置いたにも係らず正してないのなどは目錄を作る方が功を急ぐ爲めであらう。此の機會に前の紹介の折に舉げた遺漏の追加を書いて北海道地學文獻の完璧を祈つて止まない。一は神保小虎先生の北海道地勢と地質礦物ノ話(東京地學協會報告第十一卷第十一號三—九頁明治二十二年)と北海道探究ノ進歩(同上第十二卷第十一號及第十二號、三—十一頁、明治二十三年)で、二はゴッドフレの日本地質志

(Godfrey, J.G., Notes on the Geology of Japan. Quart. Journ. Geol. Soc. London. XXXIV, p.542—554. 1878) がある。後者はライマンの地層別を日本全國におし廣めたもので、日本の地質系統を北海道の知識で征服してしまはうとした所に面白味のある論文である。これは古い方の地學雜誌に邦譯が出てゐる。(N)

○地誌目錄 內務省地理局編(覆刻編者内田元夫)

菊版二〇二頁 東京大岡山書店發行 六月

定價二圓五〇錢

明治十八年に地理局から刊行された地誌目錄は本邦地誌目錄中最も多數な書目が載録されたもので近頃では稀觀のものとなり偶々古書肆に出ても法外に高價であつた。こゝに内田元夫氏によつて原本のまゝに加ふるに間宮士信の編脩地誌備用典籍解題所收に編者の附けた番を書目の上に冠したものである。覆刻には時に誤植はあるが其の數も二十字を越さぬ様であるから使ふのに差支へはない。編者は解題を作らうとしたが其の業は中々むづかしく、自己の仕事の便を計る爲めに小部數を刊行したのださうであるが其の爲めにこの目錄が手に入れることの出来る様になつたのは地誌研究者にとつて幸である。日本地誌の目錄と解題とは從來どんなものがあつたか序に列舉して見て研究者の便に供したい。前に掲げた編脩地誌備用典籍解題(文政年中成)は二三年前印行される計劃があつたが沙汰止みになつた。和田萬吉氏の古版地誌解題は

和田維四郎先生の蒐集本の解題であり、高木利太氏の家藏日本地誌目錄正續二篇は明治以後の多くの地誌をも含むのである。此の外に地誌解題目錄といふ寫本が帝國圖書館に藏されてゐるさうである。目錄のみの方はこゝに紹介した地誌目錄を第一とし、河井庫太郎氏の日本地誌年表が東京地學協會報告第十一卷(明治二十二年)に連載されてゐるがこれは各地方に於ける地誌の新舊を一目に知ることの出来る表である。

郵岡良弼氏の日本地理志料附録には考據書目があり、増訂帝國圖書館利漢圖書分類目錄地誌及紀行之部は地誌目錄として最も部厚なものである。この外、大西氏實用帝國地名辭典所載地誌目錄、本庄氏日本經濟史文獻續篇附録の地方史誌文獻(明治以後のもののみ)、黑板氏更訂國史の研究中の主要地誌國別目錄、小林氏大日本帝國地誌通論中の地誌目錄等がある。

猶ほ淺草文庫圖書解題目錄地理ノ部、東京府藏書地理類書目等の目錄書名をのみ略目したことがある。明治以降現在に到るまでに出版された地誌目錄を作ることには甚だ重要なことであるが原本の所藏がなければ出来ることなく且つ之が掲不掲を判斷するのは容易の業ではない圖書館に關係のある地學愛好家があつて解題までとはゆかずともまづ目錄なりと集め

(S)

○人文地理學通論

別技篤彦著 地人書館發行 定價三圓三十錢

京都帝國大學出身新進の別技君は商科大學で講義されたノートを補修し、石橋博士の閱を得て本書を世に送られた菊版三百八十頁、人文地理學の發達、自然の影響、人種地理、人口地理、聚落地理、食料及び原料生産の地理、工業地理、交通地理、政治地理の九章にわたつて要を摘み、繁をさけ、いかにも手際よく最新のこの學問の傾向をこの小冊子に示めされた點に於て、誠に敬服に堪へない。しかし地理學の發達の中で一言も地圖の發達が説かれてゐない、古代の地理、古代の東洋が西洋に與へた地理及び地圖の智識の有力であつたことを無視しては、コロンブスやバスコデガマの世界發見は考へられないと考へるが著者はこれをどうみてゐられるのであらうか、も一つ産業方面の説明はあまりに世界的で一般論にすぎはしないか、例へば日本の農業で、米といふものは日本の品種は支那の米とはちがうといふ位なことは述べてあつてもよい。水産でも世界第一の日本の漁夫の働きと、其環境とはもう少し強くのべてほしい、日本の漁船一隻の平均收穫萬一千圓に對し英國のそれが五千圓だなどゝ記してあるのは、あまりに實情に通じなさすぎるではないか、工業に關しても歐米の方は地圖が出てゐるが、日本の工業はどこに記してあるのか、交通なども外國のことは例が多いが日本の交通と其發達はどこにかいてあるか、我等は人文地理學通論が今日まであまりに發展しなかつたのは、翻譯人文地理學で少しも日本の過去や實際にふれなかつた罪であるときへ憂えてゐ

る一人である、別枝君は篤學新進の士である、希くは猶一層の努力を日本もしくは東洋の研究に注がれん事を祈らざるを得ない、しかし恐らく本書は地理學を講義する人によい参考となるであらうことを信じて其賣行のよからん事をいのるものである。(藤田)

○支那邊疆概観

東亞經濟調査局 東亞小冊第十六
定價五拾錢

菊判一六四頁假裝の手頃の小冊子である。外蒙を除いて新疆、西藏、雲南の經濟及政治を要領よく纏めてあるから、此方面の新知識に乏しき者にとり絶好の参考書である。参考書の多く掲げられてゐる事も便利である。極く僅かであるが此類の書として珍らしくも飯本氏、佐藤氏など地理學者の著書が引用されてゐる事も吾等地學の徒にとつて嬉しくない事ではない。百頁以下は附録で主要な新疆、西藏、雲南に關係した外交條約が列擧され内容を一層具體化せしめてゐる。

(南太郎)

雜 報

○アラビヤ・マスカットへの日本品

アラビヤのマスカットは一九三三—一九三四度に於て印度、伊太利、英國、アフリカ、アデン、米國、獨逸、日本等と取引してゐるのであるが、綿布類に就てみると、

日本 三六二、五七九ルービー 印度 一二七、六七四
英國 二八、一九〇 其他 二一、二六〇

であつて、日本は第一位となつた、前年では日本は重要輸入國でなく、日本を含む其他諸國から合して三十五萬九千留比に止まつたが、一九三三—十四年では一躍して日本三十六萬餘留比となり、印度は第二位に下つた、マスカット市場に於ける日本のかゝる竹威的成功の眞因は、日本商社が同市場の特殊性と實需とにつき不斷の研究をなし、同地方の風俗習慣嗜好等に熱心な研究をすゝめた結果である。マスカット及びスマトラのバサーといふバザーには必ず日本商品が出てゐて綿布、人絹は申すに及ばず、靴、ガラス、婦人裝身具、烟草マツチに至るまで日本品である、日本のセメントは安いといふので賣行がよい、恐らく一九三四—三五年度は日本よりの輸入は増加するであらう、日本品の進出に對し、凋落したのは英國である、英國品では蓄音器、酒精飲料、食料品を除いて、其の原價の高いこと、商人が地方的事情を研究しないことのために段々と衰滅してゐる、印度の工業能力でも日本の様に廉價で實用向な商品を生産することが出来ないから、印度の商品も日本に押され氣味だ。

右は一九三五年三月の印度商業通報の記事からの索引である、日本人も世界のいかなる市場といへども、努力して開拓しなくてはならぬ。

○マルガリン工業の統制

歐洲の工業が進み、都市隆